

広報

第16号

2016年
(平成28年) 8月

目次

ご挨拶	1
退任ご挨拶	2
新任教授紹介	4
受賞	5
国際交流	9
行事紹介	11
歯学研究科・教室紹介	16
若手研究者紹介	18
特別寄稿	20
北海道大学病院歯科診療センターのご案内	23
編集後記	24

北海道大学大学院歯学研究科・歯学部・歯科診療センター



歯学部・歯学研究科の現状と今後



北海道大学大学院・歯学研究科長・歯学部長

横山 敦郎

北海道大学歯学研究科・歯学部・歯科診療センター 広報 第16号をご覧くださいありがとうございます。歯学研究科長・歯学部長の横山と申します。

北大歯学研究科・歯学部の現状と今後について紹介させて戴きたいと存じます。

本年度（平成28年度）より北海道大学を含む国立大学法人は、第3期中期目標期間となり、歯学研究科・歯学部も27年度に中期計画を策定しました。その概要ですが、歯学部については、4学期制の活用による多様な人材の育成、臨床教育の充実による優れた医療人の養成、また、大学院については、優れた歯学研究者・教育者の育成、研究力の強化、イノベーションの創生、臨床研究の推進等を計画しています。

歯学部においては、28年度から一部ではありますが4学期制を導入し、さらに、これまでにほとんどが必修科目であった授業に、海外留学などの選択科目からなるフリー学期を設定する予定です。また、大学院の組織改革として、平成29年度から現在の歯学研究科を、大学院生が所属する教育組織としての歯学院、教員が所属する研究組織としての歯学研究院に改組することを計画しています。超高齢社会の到来、グローバル化の進行、生命科学の急速な発展など大きく社会が変化しつつある中で、現在、さらに近未来に生じうる課題に対しては、これまでの体制では学際領域を含めた多分野にわたる横断的な教育を推進することは難しいため、北海道大学が有する教育・研究に関する資源を最大限に活用する大学院教育組織を編成することが不可欠と考えたからです。平成26年度から歯学研究科内で検討を始め、平成29年度の改組を目指し

て、現在文科省に申請をしており、改組に伴い大学院のコースの再編も行う予定です。

国際化事業については、昨年8月にスウェーデンのカロリンスカインスティテュート、今年6月に中国の山東大学と部局間交流協定を締結しました。また、韓国全北大学との5年に一度の学術交流記念シンポジウムを、昨年10月に北大で開催し、今年10月には全北大学で行う予定です。中国医科大学とも今年9月に学術交流シンポジウムを開催します。さらにスーパーグローバル大学創成事業の一環であるトップコラボ事業として昨年6月にカナダのブリティッシュコロンビア大学から、また8月にはデンマークのオーフス大学とスウェーデンのカロリンスカインスティテュートから研究者を招き、シンポジウム、講演、セミナーを行いました。本年8月には、トップコラボ事業を発展させたHokkaidoサマーインスティテュートを2科目開講します。このように歯学研究科・歯学部の国際化は確実に進みつつありますが、今後は、これらの海外大学との交流のさらなる実質化を推進し、新渡戸カレッジを含めた学部学生の留学、海外からの留学生の増加、大学院生や若手教員の中長期の海外留学、国際共同論文の増加へとつなげていきたいと考えております。

中期目標の一つとして、イノベーションの創生を計画しています。これは、北海道大学歯学部の新たなミッションである「国際性・独創性を持った研究者の養成、産官学の歯学研究拠点の形成、北海道における高度歯科治療の中核的役割」の一つの柱でもあり、本年度中に北大歯学部発のベンチャーを立ち上げることを計画しています。

北海道大学歯学部は昭和42年に設立され、北海道大学の15学部の中で最も新しい学部ですが、来年、平成29年には創立50周年を迎えます。今後のさらなる発展のため教職員一同、一丸と

なって教育、研究、臨床に取り組んでおります。

今後とも、北海道大学大学院歯学研究科・歯学部、歯科診療センターを何卒宜しくお願い申し上げます。

退任ご挨拶

定年による退任にあたって



北海道大学名誉教授
(前歯学研究科歯周歯内療法学教室担当教授)

川 浪 雅 光

私は平成28年3月31日をもって、北海道大学歯学研究科歯周歯内療法学教室の担当を退任いたしました。1970年北海道大学歯学部の学生として入学以来、大学院博士課程修了までの学生としての10年間、1980年からの教員としての36年間、計46年間にわたり、この素晴らしい学究の場でのびのびと過ごさせていただいたことを思うと、感謝の一語につきます。この間、沢山の恩師、先輩、同僚、そして後輩達に教えられ、助けられ、励まされ、喜びを共有し合いながら、歯周病や進行した虫歯の治療を中心に、教育・研究・臨床に励んでくることができました。私のこれまでの人生のほとんどがざっしり詰まった、そして楽しく夢中に過ぎてしまった時間とも言えます。初代石川教授と前任の加藤教授の下でのびのびと研究させていただきましたし、若い時から教室運営の様々な業務も体験させていただきました。私が3代目の教授になったのは、2001年でした。私にとっては新たな教室作りの不安や障害は全くなく、優秀で意欲溢れる若手がそろっていましたので、加藤教授時代の

教室の方向性やシステムをスムーズに踏襲し、気心知れた若い人との教育研究と臨床の仕事は楽しく、進歩を実感できる毎日でした。

我が教室の研究は、初代教授の時代から、歯を抜かずに機能させる治療を発展させる課題に焦点をあててきています。私も若い時からその意識で行ってきましたが、教室の次を担う世代のリーダーが、近い未来の臨床に新たな診断や治療法として還元できるよう、私を凌いで進めてくれているのを実感しています。

臨床に還元できた研究成果の第一は、超音波を利用した歯の清掃装置を開発して、外科手術の必要な歯周病の患者さんに、麻酔も手術もしない歯周治療法を応用できるようにしたことです。歯周病患者の苦痛を軽減するとともに、外科治療の困難な患者にたいしての歯周治療の適応を拡大することができたと考えています。現在ではこの治療ができる超音波装置が日米欧の多くの代表的メーカーで発売され、臨床で広く使われています。

もう一つの臨床応用できた教室の研究は、歯

の根が破折して抜歯とみなされていた歯を接着して治療する方法を開発してきたことです。現在破折した歯根は世界中で抜歯しなくてはならないと考えられており、我が国においても、超高齢社会となるにつれ、歯根破折による抜歯が増えています。生体親和性の優れた接着剤を応用し、破折歯根の接着治療の基礎的研究、および臨床研究では、世界のどこにも負けない先端を走っているという自負があります。“歯根破折歯は抜歯”という世界の常識を変える日もいつかは来るのではと、退任後にもずっと注目していたと思います。

歯周病の治療で、最も求められている大きな研究課題は失われた歯を支える組織を再生させることです。再生にかかわる細胞が増殖したり、組織を再生しやすくするための足場や環境を研究してきました。動物実験の段階では有望な成果が出ていますので、将来臨床に応用できるようになるのを期待しています。

また、我が国が迎えている超高齢化社会に対応するべく、3年前から始めた臨床研究があります。どのような歯科治療が患者さんにストレスや侵襲を与えるかを明らかにして、安心安全な歯科治療を高齢者に積極的に行えるようにする研究です。文部科学省に認められ、北大病院の歯科診療センターに43台の患者生体情報モニター接続型デンタルユニットを設備できました。

平成19年から23年までの2期4年、研究科長・歯学部長の重責を任せられ、北大歯学部教授会のチームワークの素晴らしさのおかげで、大学院歯学研究科の老朽化した研究棟の耐震機能改修、学生の安全教育・設備の充実を実現できました。

日本歯周病学会と日本歯科保存学会の理事として教育委員会委員長を務め、我が国の歯周病学教育の改善に若干の貢献をできたと思います。さらに、厚生労働省歯科医師国家試験委員・副委員長・委員長として、我が国の歯周病学、歯内療法学及び歯学全般の教育の質の向上に努めました。

国際貢献としては、アジアにおける歯学教育の発展、韓国全北大学歯学部、中国医科大学口腔医学院、中国ハルビン医科大学口腔医学院、第四病院、バングラデシュダッカ大学歯学部の教員養成・学術発展に貢献するとともに、バングラデシュ首都ダッカにサッポロデンタルケアならびにサッポロデンタルカレッジの設立・発展にも微力ながら貢献できたことを誇りに思っています。

若い人の情熱に引込まれながらこのような様々な仕事をやり遂げてこられたのは、学生教育や外来診療で自分の責務を全うしながら、研究や臨床で若い医局員を親身に指導してくれた菅谷准教授はじめ教員・医員の皆様のおかげであると心から感謝しております。さらに、歯学部教授会をはじめとする歯学部の多くの仲間にも、いつも暖かい応援をいただき、気持ちよく業務をさせていただき、ありがたかったと思います。そして、退任直前におまけのご褒美ともいえる日本歯科医学会会長賞を受賞する栄誉をいただきました。この賞は、我が国の歯学界すべての学会の上位に位置する歯科医学会において最高位の賞でありますので、大変光栄であるとともに、北大人として大変うれしく思いました。

私にとって、この46年間の歯学との時間と記憶は、自分の子供と同じように大切な人生の宝物であります。これらのうちで幾分かが社会の皆様へ直接間接を問わず、お役に立てることとなり、一緒に頑張ってくれた若い人たちが、私を凌ぎ活躍してくれていることに、心から喜びを感じます。そして、このような幸せな私を育てていただきました恩師、先輩、仲間、そして後進の皆様へ、再度深く御礼を述べますとともに、皆様のますますのご健康、ご活躍、北海道大学歯学部・歯学研究科ならびに北海道大学病院歯科診療センターの益々の発展を祈念いたしまして退任に際してのお礼の言葉とさせていただきます。

新任教授紹介



北海道大学大学院歯学研究科
口腔病態学講座 歯科放射線学教室

箕輪 和行

【就任にあたり】

私は北海道大学歯学部の16期生として卒業し、2016年1月に歯科放射線科学教室3代目の教授に就任させていただきました。臨床において、歯科では歯学部附属病院時代から今日まで入院施設を有しており、外来と入院下での診療を行ってまいりました。入院下では口腔領域の良性・悪性腫瘍、炎症・感染症、発育異常、外傷などについて手術・治療を行っております。外来と入院患者の診療に対して歯科放射線科は歯科領域の画像診断だけではなく、全身の画像診断を行ってきました。全身の画像診断という何で歯科でと疑問に思う方がいるかとおもいます。歯科領域の悪性腫瘍の転移先は頸部リンパ節、肺が中心であり、時には腹部や体幹骨にみられ、そのため歯科領域の悪性腫瘍の治療に際し、頸部から躯幹の診断が必要になります。また、躯幹部の悪性腫瘍が歯科領域に転移することもあります。一方、入院患者の多くは高齢者であり、高血圧や糖尿病、脂質代謝異常などの生活習慣病を有している方が多く、それに伴う画像の評価が歯科領域疾患の手術前に必要となるため全身の画像診断が要求されるのです。歯科の画像診断というと齶蝕（虫歯）の時に検査される歯のレントゲン写真や顎全体の写真を撮影検査・診断しているように思われますが、実は齶蝕や歯周炎の時に検査するエックス線写真の診断の比重は全体の中では高くはなく、我々はCT（医科用、歯科用）、MRI、造影検査、核医学検査、超音波の検査診断を放射線診断科、核医学診療科と連携し重点的に行っております。

さらに、放射線治療科と連携し、歯科領域の悪性腫瘍の術前・術後の放射線治療も行っております。2014年に開設された北海道大学病院陽子線治療センターにおいて新たな頭頸部癌治療にも参加しております。

歯科放射線科が医学部放射線治療科、放射線診断科、核医学診療科と連携をとり診療が可能になったのは私が入局した当時から今日まで教室には多くの医師が在籍していたためです。今日も2名の医師が在籍している関係で、医科放射線診断科・治療科、核医学診療科との連携が構築し易い環境が続いております。これら診療科との交流、協力関係があるため、歯科放射線科の教室員は医学部放射線科、核医学診療科での診断および治療の研修が可能となっております。そのため、私も卒業後8年間は当時の医学部附属病院で研修を受けることができ、今日の画像診断の基礎を構築することができたように思っております。

歯科放射線学の教育面では卒前、卒後において最新の画像診断と陽子線治療を含めた放射線治療を中心に指導して行きたいと考えています。

また研究面ではCT、MRIにおける歯科の永遠のテーマである金属アーチファクトの減少、MRIにおける組織悪性度診断、口腔腫瘍のIMRT（強度変調放射線治療）、陽子線治療における口腔内金属の影響などを研究のテーマとして考えております。

今後とも宜しくお願いいたします。

第26代 日本さくらの女王に選ばれて

北海道大学歯学部3年生

増田 愛子

今年の2月、第26代日本さくらの女王一席に選出されました、歯学部3年生の増田愛子と申します。日本さくらの女王は公益財団法人日本さくらの会が、2年に一度全国公募により選出しています。日本さくらの会は、1964年東京オリンピック開催の年に日本の花「さくら」の愛護、保存、育成、普及等を目的に、衆議院議長を会長として超党派の国会議員有志により設立されました。以来、「さくら」の植樹や愛護、「さくら」名所の保全、名木・巨木保存、また、「さくら」を通じた国際親善活動を50年以上続けています。さらに、「さくらの日」の制定、「さくら功労者」の表彰、「さくら祭り中央大会」の開催ほか、「さくら」に関する相談、情報の提供を行ってきました。こうした活動の象徴として、日本さくらの女王は表彰式、植樹式、国際さくら祭りへの参加を通じた国際親善などのお手伝いをしています。

いつの時代も巡り来る季節の中で、日本人の心にこれ程多くのことを語りかける花は「さくら」以外に無いと確信しております。門出の季節に希望、喜び、嬉しさ、悲しさ、さみしさ、全ての感情を表す不思議な魅力を「さくら」は持っています。現代においては「さくら」を愛でる文化は日本国内にとどまらず、世界中に広がりつつあります。このように、日本を代表す

る花であり、世界中から愛される「さくら」の輪を広げるお手伝いをぜひさせて頂きたいと思い、応募いたしました。

選出後、中国の無錫と上海、アメリカ合衆国のワシントンにおけるさくら祭りや、栃木県と新潟県における植樹式に参加させて頂きました。また、5月には全米さくらの女王が来日され、日本を紹介しつつ、安倍総理大臣、秋篠宮妃殿下、衆参両院議長、都知事などへの表敬訪問もさせて頂きました。今後はドイツのハンブルクや、日本国内各地のさくら祭り、植樹式に参加を予定しております。

この度、このようなお役目を頂戴し、既に様々な方にお会いしましたが、その際、「どこの大学で何を学んでいますか。」と皆様から必ず質問されました。「北海道大学で歯学を学んでいます。」とお答えしますと、皆様大変喜んで下さいます。と言いますのも、北海道大学にはさくらとのご縁が深いからです。前身の札幌農学校時代、学長でおられたクラーク博士はさくらを大変好まれ、母国アメリカにもさくらをと、種を送ったそうです。また、同じく札幌農学校で教鞭を執られ、『武士道』の著者である新渡戸稲造先生も、日本人の武士道をさくらと重ね合わせていらっしゃいました。日本さくらの女王としての活動は今後2年間続きますが、北海



道大学歯学部の学生として誇りを持ち、活動して参りたいと思っております。まだまだ未熟ではございますが、温かく見守って頂けましたら幸いです。

最後になりますが、日本さくらの会では日本国内において希望される方に、桜の苗木を50本以上から贈呈しております。ご興味のある方は、ぜひ日本さくらの会にご連絡下さい。

和歌山国体を終えて

北海道大学大学院歯学研究科
博士課程1年 口腔機能解剖学教室
国民体育大会ライフル射撃競技 北海道代表
柳 あさこ

北海道代表として迎えた3回目の国体（H27紀の国 和歌山国体）、競技2日目にエアライフル成年女子立射40発競技を16位で終えた。コンディションは良好であったが自分の予測と異なる弾痕が多く、かなり苦しい試合であった。

エアライフル成年女子の場合、国体では立射40発競技と伏射40発競技の2種目に自動的にエントリーされる。伏射競技は元来、22口径ライフルで行われる競技（日本においてエアライフル伏射は国体のみ実施される）であり、代表を決める予選は立射競技で行われる。当時の私はエアライフル1丁しか所持しておらず、伏射競技は「おまけ」であり普段の練習は立射に重点を置いていた。他県をみると22口径ライフルも所持し伏射のトレーニングも積んでいる代表選手が多かったため伏射で勝負することは野暮だと考えていた。

この「おまけ」であるはずの伏射で今回は奇

跡が起きた。しかし、この奇跡には振り返るとちゃんとした軌跡があった。

国体では、試合日程の2日前から公式練習がセッティングされている。例年であれば参加しない伏射の公式練習に今回は参加していた。伏射の公式練習は1日目午前中。北海道選手団と一緒に移動しては間に合わないため、一人で前日入りをして公式練習に臨んでいた。その時、懇意にさせて頂いている愛知県の監督がなんと私の伏射競技を指導し、セッティングを微調整してくださった。その監督は現役選手で、22口径ライフルの伏射ベテランである。たった一時間であったが大変濃い練習をすることができた。

また、趣味であった筋力トレーニングも功を奏した。研修医の間、新たに僧帽筋や広背筋、肩関節周囲の筋の強化に取り組んでいた。たまたま、伏射姿勢を維持できる体づくりを無意識



で行っていた。

そして迎えた国体最終日、伏射40発、北海道の監督や選手、そして愛知県監督に見守られ淡々と伏射競技は進行していった。勝ちたいと思うこともなく、焦る気持ちも全くなかった。無心だった。勝手に銃が止まる感じがした。試合後、振り返ると皆が笑顔だった。速報掲示板を見ると自分が4位に位置していた。自分の専門外の種目。誰も（もちろん私も）予想していなかった。

表彰式、3位の自衛隊体育学校射撃部所属、5位のALSOK射撃部所属のいわゆるプロ選手

に挟まれ表彰台に上がった。私もこの選手たちと同じ土俵で戦いたい、一度しかない人生勝負したいと思った。

そして現在、運命的に出会った22口径ライフルを新たに所持し、大学院に在籍しながら本州で行われる合宿や試合に参加している。交流の輪も広がり、本州の選手と情報交換を多くするようになった。射撃の技術は確実に向上している。まずは国の強化指定候補になることが第一段階の目標だ。歯科医師として、アスリートとして、応援して下さる多くの方々への感謝を忘れずに全力で邁進していきたい。

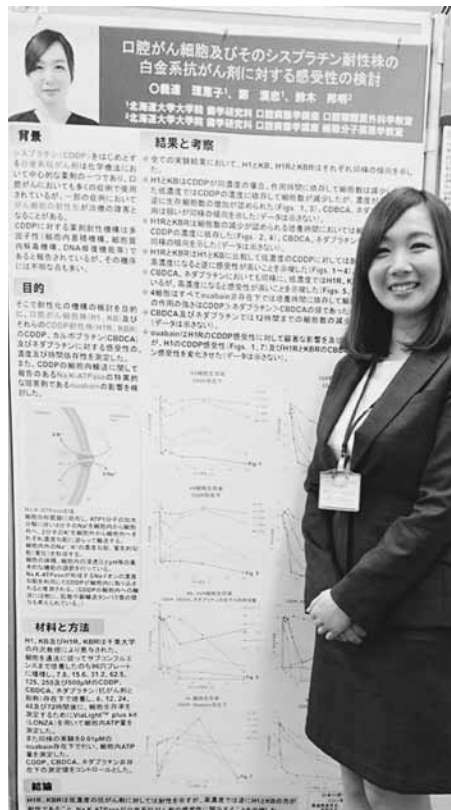
学会賞受賞

受賞名：日本口腔科学会 学会賞優秀ポスター賞

受賞者名：義達理恵子（口腔顎顔面外科学教室）

受賞演題名：口腔がん細胞株及びそのシスプラチン耐性株の白金系抗がん剤に対する感受性の検討

学会名：第70回NPO法人日本口腔科学会学術集会（平成28年4月15～17日 福岡）



2016年口腔科学会

この度、平成28年4月15～17日に行われた日本口腔科学会学術集会において優秀ポスター賞をいただきました。由緒ある学会で研究成果を評価していただき大変光栄に思っております。ご指導を賜りました細胞分子薬理学教室の鈴木教授、口腔顎顔面外科学教室の鄭教授、ならびに両教室の諸先生方に深く感謝申し上げます。

私の研究内容につきまして簡単に申し上げます。白金系抗がん剤による化学療法において治療を障害する耐性化の機構の解明を目的とし、

口腔がん細胞株（H1、KB）及びそれらのシスプラチン耐性株（HIR、KBR）の白金系抗がん剤に対する感受性の、濃度および時間依存性を測定し、またシスプラチンの細胞内輸送に関して報告のあるNa, K-ATPaseの特異的な阻害剤であるouabainの影響を検討しました。その結果、耐性株は低濃度の抗がん剤に対しては耐性を示すが、高濃度では親株の方が耐性であること、Na, K-ATPaseが抗がん剤の感受性に関与することが示唆されました。今後さらなる探索を進めていきたいと考えております。

国際交流

歯学部・歯学研究科・北大病院歯科診療センター の国際化・国際交流

昨年度(平成27年度)の歯学部・歯学研究科・北大病院歯科診療センターにおいて実施されました国際交流について報告いたします。

4月20日、韓国・江陵原州大学歯科大学と国際交流姉妹校、部局間交流協定を結びました。ここでは当研究科、土門卓文教授を中心として交流がなされ、当日は調印式、学術交流、歓迎会を行いました。北海道大学ソウルオフィス、車柱榮所長も参加してくださいました。懇親会は大変盛り上がりしました。

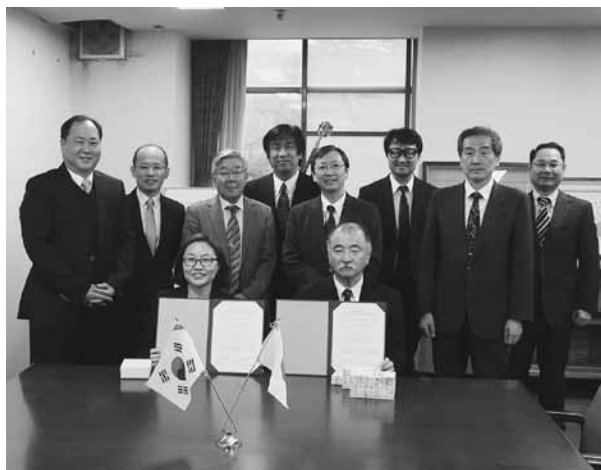
5月27日、前年度末にスウェーデン・ウメオ大学へ1ヶ月留学しました、当時学部学生でありました玉野真里果先生、柳あさこ先生が当研究科スタッフの前で留学の報告会を行いました。横山敦郎歯学部長と井上哲教授を中心として行われたプログラムでした。学生らしい、ユーモアたっぷりの発表会で、英語でのプレゼンもあり、留学が大変充実していた様子が伺えました。

8月25日、スウェーデン・カロリンスカ研究所と部局間交流協定締結を行いました。当時、歯学部として世界ランク(QS World University Rankings by Subject 2015 - Dentistry)第1位であるカロリンスカ研究所歯学部学部長、Mats Trulsson教授が当研究科を視察、講演会を数回

に渡り開催され、横山敦郎歯学研究科長とともに調印されました。今回の調印により研究者、特に大学院生が相手先へ留学する環境が整いました。

8月25-27日、スウェーデン・カロリンスカ研究所、Mats Trulsson教授、デンマーク・オーフス大学、Peter Svensson教授とともに当研究科教員によるサマーインスティテュートトライアルが開催されました。サマーインスティテュートとは、北海道大学が主催するサマースクールのことで、本学のスーパーグローバル大学創成プロジェクト(日本学術振興会支援)の一部、当研究科(横山敦郎研究科長)から提供する最初のプロジェクトとなりました。海外より3名の大学院生(いずれも韓国・全北大学校歯医学専門大学院より)が参加し、口腔生理学と顎関節症をトピックとして講義を行いました。世界のトップランナーを招聘し、質の高い教育の提供ができました。

10月19日、韓国・全北大学校歯医学専門大学院より学部長を含めた教員、同窓会員の先生方が当研究科を訪問され、国際交流姉妹校、部局間交流協定更新調印式が行われました。全北大学校歯医学専門大学院との交流は25年にも及び、5年ごとにお互いの大学を団体で訪問して



韓国・江陵原州大学歯科大学と国際交流姉妹校、部局間交流協定



韓国・全北大学校歯医学専門大学院との国際交流姉妹校、部局間交流協定更新調印式

います。今回は姉妹校提携25周年記念学術講演会を開催しました。

平成28年2月25日－3月17日、ラーニングサテライト事業を行いました。こちらもスーパーグローバル大学創成プロジェクト（日本学術振興会支援）の一部で、本学の教員が海外の大学で教育を行うというもので、本学部学生が二人（橋本里紗現研修医、実藤 潤現研修医）、ス

ウェーデン・ウメオ大学を訪れ、現地の教育を受けました。3月3－8日には本研究科より教員（井上 哲教授、有馬太郎講師）が訪問、講義を行いました。本事業は今年度も行います。

以上、大規模な交流のみ報告しましたが、個々の国際交流も多く行われています。今年度も予定はすでに組まれており、昨年度以上に盛り上がるよう、お手伝いしてまいります。

行事紹介

北海道大学ホームカミングデー 2015実施報告書

部局等名	大学院歯学研究科・歯学部	
企画行事名	最新の歯学研究と歯科医療を知る!!	
日時	平成27年9月26日(土) 13:30-15:30	
場所	歯学研究科A棟2階歯学部講堂	
実施状況報告	<p>歯学研究科・歯学部では、「最新の歯学研究と歯科医療を知る!!」として、本研究科所属の教員による最新の研究及び臨床についての講演会を企画しました。</p> <p>歯学部講堂で開催された講演会では、初めに横山敦郎研究科長・学部長が歓迎の挨拶を述べた後、本年4月から使用可能となった多目的会議室等、新たな施設の説明を含め、歯学部の現況報告を行いました。</p> <p>引き続き、歯科医療及び研究の最新トピックスについて、本研究科所属の各分野の教員が報告を行いました。参加者はメモをとるなどしながら、各教員の説明に熱心に聞き入っておりました。</p> <p>その後、飯田順一郎副病院長(歯科担当)が、一昨年に移転を終え、診療を開始した歯科診療センターの紹介を行いました。</p> <p>歯学研究科・歯学部の講演会は、予定時間を超えて行われ、盛会のうちに終了いたしました。</p>	
参加者数	同窓生	8名
	その他	1名
	合計	9名

※留意事項等別紙



横山研究科長による挨拶



飯田副病院長によるセンター紹介

歯学研究科で消防災訓練を実施

歯学研究科では10月29日（木）に消防訓練を実施しました。

今回の訓練は、C棟3階ポリクリ室から出火したとの想定で、自衛消防隊長である横山敦郎歯学研究科長の指揮により、通報連絡班、避難誘導班、消火班、救護班、防護措置班の各担当に分かれ、現場の確認、消防署への通報、非常放送、避難者誘導、消火活動等の訓練を実施し、

学生・職員（大学病院職員を含む）等約60名が参加しました。

訓練終了後、横山研究科長から「今回の訓練は順調に実施できた。災害時にはこの訓練を思い出して行動して欲しい。」との講評がありました。

（歯学研究科・歯学部）



消火器操作訓練の様子



救助袋を使用した避難訓練

歯学研究科で全北大学校歯医学専門大学院との 姉妹校提携25周年記念交流行事を開催

歯学研究科と大韓民国全北大学校歯医学専門大学院との姉妹校提携は、平成2年に創始され、現在までに5年ごとの記念行事を含めて活発な交流が行われております。

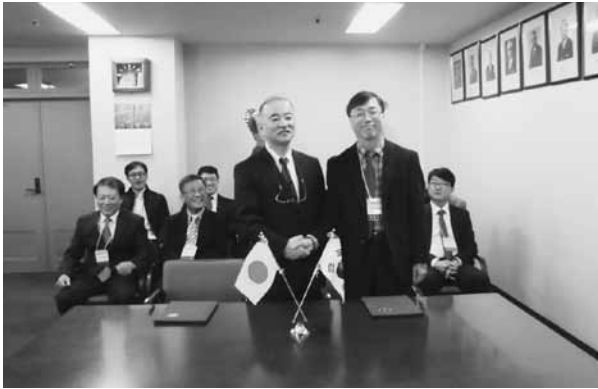
このたび、10月19日（月）に全北大学校歯医学専門大学院から、Lee, Kwang Won大学院長はじめ15名の教員等が来学され、両校の教育及び学術研究に関して、今後さらに協力関係を発展させるべく姉妹校関係を継続する旨の協定調

印式を執り行いました。

引き続き行われた共同学術シンポジウムでは、最新の研究成果についての発表及び質疑応答が活発に行われ、両校にとって有意義な交流となりました。

これにより今後、両校の学術交流が一層推進されるものと期待されます。

（歯学研究科・歯学部）



協定調印式



調印後の記念撮影

歯学研究科で「動物供養祭」を挙

歯学研究科では、11月26日(木)午後4時30分から、学部会議室において、動物供養祭を執り行いました。供養祭は、過去1年間に歯学教育・研究のため実験に供された動物(ラット、

マウス計2,135体)への感謝と追悼のために毎年実施しており、教職員、学生等の動物実験関係者約30人が参列しました。

供養祭では、最初に横山敦郎歯学研究科長か



参列者に挨拶する横山研究科長



「祭文」を読み上げる柴田委員長



献花する参列者

ら挨拶があり、次いで動物実験委員会委員長の柴田健一郎教授から、歯学研究の進歩に尊い命を捧げて下さった多数の実験動物の御霊の安らかなることを願う旨の「祭文（さいもん）」が

捧げられ、最後に参列者全員により献花が行われました。

(歯学研究科・歯学部)

お口の健康と歯科医療 その1 —患者サイドに立った知識の浸透—

11月7日（土）

会 場：歯学部講堂

主 催：歯学研究科

実施責任者：歯学研究科 講師 有馬太郎

歯学研究科では、11月7日（土）午前9時30分から午後1時まで歯学部講堂にて、市民公開特別講座「お口の健康と歯科医療 その1」を開催しました。

本講座はサステナビリティ・ウィークとの共催であり、歯学研究科としては8つ目の企画でした。食事を楽しくするために必要なお口の健康と、問題が発生した場合の対処法・治療法について紹介することを目的として、一般の方でも十分理解できるわかりやすい言葉で4名の講師が講演を行いました。

はじめに、歯学研究科長・歯学部長の横山敦郎教授から開会の挨拶があり、次いで北海道大学病院の兼平 孝講師から「食の歴史」について、歯学研究科の松沢祐介助教から「歯の再殖」

についての講演が行われました。また、一般社団法人北海道歯科衛生士会・札幌北楡病院歯科衛生士の原田晴子氏より「歯磨きのタイミング」について、最後に、歯学研究科の有馬太郎講師から「顎関節症」についての講演が行われました。

また、同講座は国立大学フェスタの行事及び道民カレッジ連携講座としての開催でもありました。当日は少し風が強く、イチョウ並木の観光客も少なかったために観光がてらに参加される方は少なかったのですが、計25名の方が参加されました。参加者の中には、インターネットで3年前に本講座を知って以来、毎年恵庭から来てくださる方もいて感謝するばかりです。

本研究科では、今後も研究成果の地域社会への還元の一環として、道民カレッジ等に参加し、市民公開特別講座を企画・実施する予定です。また、サステナビリティ・ウィークにも持続的に話題を提供して参ります。



兼平講師による講演の様子



原田歯科衛生士による講演の様子

歯学研究科・歯学部がカロリンスカ研究所歯学研究科 と部局間交流協定を締結

8月5日、スウェーデン、カロリンスカ研究所よりMats Trulsson歯学研究科長、Peter Svensson客員教授を本学歯学研究科へお招きし、部局間交流協定を締結しました。

カロリンスカ研究所は医科・歯科に特化した研究・教育機関で、医科系ランキングでヨーロッパ第2位、学部として世界第1位と大変有名な機関です。

今回の部局間締結により、本学学生のカロリンスカ研究所への留学が容易となり、また相手

先教員の今後の招聘、講演会、交流会を通じた本学における講義の質の向上、教員の教育の質の向上、学生の学習・研究意欲をかき立てることなどが期待できます。留学学生による共同研究、発表等で実績を積み重ねていきたいと考えています。また、医学研究科と連携し、大学間交流協定締結へのステップアップなどさらなる発展を期待しています。

(歯学研究科・歯学部)



調印前のMats Trulsson研究科長（左）
と横山研究科長



調印後のMats Trulsson研究科長（左）
と横山研究科長



調印後、雑談をするMats Trulsson研究科長（左）
と歯学研究科教授

【口腔生理学教室】

＜研究内容＞

我々の研究目的は生理学と脳科学の見地から「摂食と脳と心の機能的相互連関」および「悪心・嘔吐の神経機構」について科学的手法を用いて証明し、それらを生理機能として理解して新たな概念を樹立することです。

摂食行動は本能行動であり基本的には空腹感によって開始され、満腹感によって終了します。食べた物は消化・吸収されたのち、糖代謝、脂肪代謝、産熱、リン酸化に用いられ、それらの代謝産物によって摂食行動はフィードバック制御を受けます。また、摂食行動の調節には食欲調節ホルモンの動態、胃腸の状態、情動や運動、飲水量、口腔感覚、体性感覚、悪心や嘔吐、味覚、嗅覚、嗜好および嫌悪学習による記憶獲得など、様々な因子が絡んでいます。ヒトの摂食行動は他の動物と異なり、環境要因や社会的要因によっても影響を受けます。すなわち、ヒトは空腹でなくても、時計が正午を指すと昼食をとる、美味しそうな匂いがすると食べる、誰かが食べていると自分も食べるなどの行動をします。

食べる事はエネルギー摂取の観点から重要ですが、ヒトにとって食事は楽しみであり、食行動を通じてこの上ない幸福感を味わうことができます。この感覚を原動力として人類は地球上の各地で多種多様の食文化を育んできたのだろうと容易に想像がつかます。このように「摂食と脳と心の機能的相互連関」に関する研究は、多岐にわたる要因の一つ一つの影響と各要因の

複合的影響を調べる必要があり、膨大なファクターが絡むため疑問点は増えるばかりですが、興味は尽きません。

生理学とは文字どおり“生きる理(ことわり)”を明らかにする学問であり、生体（全身から細胞レベル）の機能を研究対象にします。これに脳科学の観点を入れると、“生きている(脳幹)” “たくましく生きる(大脳辺縁系)” “賢く生きる(大脳皮質)”の仕組みを考慮して解析を行います。科学的であるとは、実験によって仮説を検証する際に、1) 客観性、2) 再現性、3) 反証可能性、の全てを満たしていることです。単純明快な3原則ですが、これらを満たす実験データを得ようとすると、時として多くの時間と忍耐を要します。それでも本物を目指す限り、この3原則を曲げることはできません。当教室では、「摂食と脳と心の機能的相互連関」の研究という大枠の中で、自分の興味や目的が明確な内容を各自の研究テーマにしています。研究実習で配属される学部学生にも同じようにしています。このような実験環境から生まれたデータは自ずと洗練されたものになります。つまり好きでやるのだから絶対に本物を追求します。たとえ多大な忍耐と時間を要したとしてもです。現教室の体制になって8年が過ぎ、このような研究スタイルが定着してきたように思います。各教員の詳しい研究活動や業績については、歯学研究科口腔生理学教室のホームページをご覧ください。

(文責 船橋 誠)

【歯科放射線学教室と放射線治療】

歯科放射線学教室は1978年8月歯学部の変員増に伴い(40→80人)、小児歯科と一緒に開講しました。初代教授は山崎岐男先生(1978-1994)、二代目は中村太保教授(1994-2012)、4年間の教授不在時期を経て現在は箕輪和行教授が講座主任(2016-)となっております。講座開設前に歯科放射線学の教育・臨床を担当していた飯田孔陽先生(のち千葉県がんセンター放射線治療部長)の存在も大きかったと思われます。

当教室はデンタル・パノラマ撮影と読影、各種画像診断法の教育を行っており、臨床では画像診断業務が主体です。その一方、放射線治療にも携わってきました。今回は当教室で行っている放射線治療についてご紹介したいと思います。

過去には長い間、セシウム針を使った舌がん

の小線源治療に参加していましたが、セシウム針の製造中止により現在は行っていません。もちろん過去に治療した患者さんの診察は続いています。逆に現在は放射線治療装置及び照射法の進歩は目を見張るものがあり、副作用を減らした高精度治療が可能となってきています。現在の当科の役割は歯科の視点でいかに有効な放射線治療法を選び、患者さんの苦痛を減らすかという点を主体に臨床を行っております。

副作用軽減のためのマウスピース作成、放射線の線量分布を考慮した口腔ケアを実施しています。放射線治療のスケジュールに合わせて、照射前抜歯、金冠除去、義歯調整などを行います。照射中はもちろん照射後も線量分布を加味した歯科治療が必要です。抜歯禁忌の歯の選定、骨壊死の誘引にならないような義歯設計などの臨床が主な業務となっております。



北大病院陽子線センター外観



陽子線センター治療室



陽子線治療用マウスピース

北大病院の所有する放射線治療装置は全国でもトップレベルであり、特に昨年から臨床稼働している陽子線治療センターは道内各地から紹介患者が来院しています。陽子線治療の特徴は放射線が体の後ろに突き抜けないため、重要臓器を避けた照射が可能である点です。頭頸部がんについても今回の保険改正で唾液腺腫瘍及び切除不能扁平上皮癌についての先進医療が認められ、現在まで4例の頭頸部がん患者の治療を

行っています。当教室では陽子線治療の準備に必要な金冠除去などの歯科処置とマウスピース作成を全て任されています。特にマウスピースの作成は放射線線量分布に影響を与えない歯科材料を選び作成しています。今後は今まで築き上げてきた医科歯科連携を大切に、頭頸部がん患者のQOL向上のため頑張っていきたいと考えています。

(文責 大森 桂一)

若手研究者紹介

今年の広報誌から新しく「若手研究者紹介」のコーナーが始まりました。このコーナーでは歯学研究科で研究をしている若手研究者を紹介したいと思います。

人類学から見る歯の世界

大学院歯学研究科 口腔機能解剖学教室
(京都大・院理卒)

森 田 航

いつ頃からかはっきり覚えていませんが、私はマヤ文明の考古学に興味を持ち、大学の学部生の頃からバックパックを背負って一人でメキシコ〜グアテマラの遺跡を見て回ったりしていました。初めて参加したマヤ遺跡の発掘でたまたま埋葬跡に当たり、人骨を発掘する機会に恵まれました。私は考古学で一般的に扱われる土器や石器よりもこちらの方に興味を惹かれましたが、どうも考古学では人骨を研究対象としていない、人骨を専門に研究しているのは自然人類学という分野だということがわかってきました。そこで大学院から専門を変えて本格的に自然人類学を学び始めました。

歯科関係者以外で、歯の形を本当によく見ているのは意外にも人類学者や古生物学者なのではないかと思えます。歯は硬いので骨よりも圧

倒的に土壌の堆積中にも保存されやすく、動物ごとに特徴的な歯の形を持っています。最近では数十万年前まで遡ってDNAの抽出が行われていますが、我々ヒトがまだチンパンジーや他の類人猿と分岐する前の時代の化石にまではさすがにDNAが残っているようには思われません。だからこそ、歯の形が重要になってきます。私はまさにこの時代のヒトや類人猿の進化過程を明らかにしたいと思って研究しています。歯のわずかな化石からでも丁寧に見てやることで、その種の系統的な位置関係や、食べていたもの、周囲の環境など様々なことがわかってきます。また歯がどのような過程を経て形作られてきたのか、という発生過程の復元のような研究も行っています。

北大の歯学部に来て1年ほどになりますが、

基本的にはこのようなこれまでと全く変わらない研究をさせていただいています。歯学部に来て一番変わったのは周りにいる人殆どが当たり前ですが歯科医である、ということです。歯を磨かないと魔女狩りに遭うのではないかとあって、食事後はすぐ歯を磨くようになりました。

具体的な研究の中身ですが、CT機器を使って化石を含めたヒトや類人猿の歯を撮影し、形を3次元で定量化し解析する、という完全にデジタルの世界で研究しています。私の研究室では皆実験室で研究に勤しんでいますが、それに一人背を向けて、コンピュータに向き合う日々を送っています。数式を立ててシミュレーションにプログラミングという、いわゆるドライな研究生活です。ですが、結局のところ、どれだけ生の本物の化石を見たのかというアナログな経験が大切な気がします。データにはならないですが、スケッチをしたりいろいろな時代の化石と並べてただ眺めてみることも重要なのだと思います。さらに、すでに博物館などに収められている資料だけでは十分にわからないことも多々あります。進化史上のミッシングリンクを解き明かすためには、発掘によりそれをつなぐ新しい資料を得る必要があります。日常を離れて体を動かすフィールドワークには様々な面白さがありますが、基本的には地道な作業が中心で、すぐに結果が出るとも限りません。時間と費用をかけて発掘しても狙いのモノが出てくるかはわかりませんし、パッとすぐ結果が出るわけでもありません。もちろん短期的に継続して成果を出し続けることはとても大事ですが、長期的な視野に立って、目先の結果にとらわれることなく、少しずつデータを蓄積させて100年

後に残るような研究をやっていかなければならないとも強く思います。

初めのマヤ文明からしますと今やっている人類進化の研究は遠く離れているように見えますが、自分が一番知りたいこと、面白いと思うことをやる、という観点からしますと、私の中では一貫しています。とはいえ、人類の進化を知ることがすぐに何かの、誰かの役に立つわけではありません。所詮、生活の足しにはならない道楽と見る向きもあるのではと思います。しかし、人類学は、我々がヒトとして生物学的にどのような存在であるのかを理解するための視座を提供してくれます。我々が自分自身を知る時に、また他の人を理解する時にでも、誰もが陥りやすい偏見や自己中心的な考えに捉われることなく、進化という視点から我々自身の存在を相対化して眺めることを可能にしてくれるのではないかと思います。私は専門家の端くれとして、厳密な根拠を持って、我々ヒトに対する科学の営みに少しでも貢献していければと考えています。



スウェーデン・ウメオ大学歯学部で留学して

北海道大学病院 研修医
(北大歯44期卒)

橋本里紗

歯学部での6年間のカリキュラムを修了し、無事に国家試験を終えた2月下旬から3週間、私はクラスメイトの実藤さんと共にスウェーデンのウメオ大学に留学の機会を頂きました。スウェーデンは予防歯科の先進国として知られており、中でもウメオ大学は2015年度の留学生満足度調査においてヨーロッパ諸国の中で1位を獲得しています。

ウメオはスウェーデンの北部地方に位置し、気温は札幌より少し寒いです。スウェーデンの公用語はスウェーデン語ですが、ほとんどの人が流暢な英語を話していました。

留学中はウメオ大学の留学生用の寮（コリドーと呼ばれる）で生活しました。1人部屋でキッチンが共同です。寮に住む学生は半分がスウェーデン人で、半分がフィンランド、インド、ノルウェーなど他国からの留学生でした。

今回私達は、ウメオ大学で日本でいう5年生の臨床実習に毎日参加させて頂きました。日本で歯科について一通り学習してからの留学であったため、治療内容について現地学生とディスカッションしたり、互いの大学での実習について話したりと、非常に有意義な時間を過ごすことができました。

また、スウェーデンだけでなくノルウェー、

フィンランド、フランスからの留学生達とも自国の歯科事情について英語でプレゼンテーションやディスカッションを行う機会も頂き、自身の今後の歯科医師人生だけでなく、日本の歯科医療が今後どうあるべきかを考えるきっかけとなりました。

その一方で、現地で多くの人々と会話をする中で、あらゆる分野における自分の知識の乏しさを痛感しました。日本の歯科事情については勿論のこと、他にも日本及び他国の歴史や文化、世界情勢等についての幅広い知識も、一社会人として、また会話の種として必要であると強く感じました。

今まで自身の在籍する大学でしか歯科について学んできておらず、自分の学んだ事が当たり前であり、その利点欠点については特に考えていませんでした。しかし今回スウェーデンの歯学部を訪れたことで、大学での臨床実習システムや治療に使用する材料、歯科医療制度等多くの相違点を知ることができ、自分が今まで当たり前だと思っていたそれらの事柄について客観的に見つめることが出来ました。

私は以前より歯科医師として海外で働いてみたいという気持ちがあったため、今回このように、単なる語学留学ではなく国外の歯学部を実



際に体験できたことは大変嬉しかったです。日本で私のクラスメイトは日本人のみでしたが、ウメオ大学には様々な国籍の学生が在籍し、卒業後国外で活躍する人も少なくないと聞きました。スウェーデンの歯科医師免許を持っていればEU諸国内で歯科治療を行うことが出来るそうです。グローバル社会である現代において、このように多くの国の文化があふれる環境は少し羨ましく感じました。

今回の3週間の留学は長いようであつという間でした。留学中に感じた気持ちや考えを忘れない様しっかり心に留めて、これからの歯科医師人生を歩んでいこうと思います。貴重な機会を与えて下さり、本当にありがとうございました。



ウメオ大学訪問記

北海道大学病院 歯科矯正科 研修医
(北大歯44期卒)

実 藤 潤

私は2016年2月から3月にかけて3週間の日程でスウェーデンのウメオ大学歯学部で留学しました。スウェーデンには歯学部のある大学が4校あります。首都ストックホルムのカロリンスカ研究所をはじめ、ヨーテボリ大学とマルメ大学の3校はそれぞれ南部の大都市にあります。これに対して、ウメオ大学は唯一スウェーデン北部に存在し、北部最大都市のウメオにあります。最大都市と言っても人口11万人程で、国内11番目の規模の大学を中心とした街です。

ウメオ大学は設立50年以下の高等教育機関ランキングで世界24位(2012年)に入ったり、留学生満足度調査で国内1位(2013年)に入ったりするなど、各種ランキング調査で高い評価を得ている大学です。その中で歯学部は歯学教育に定評があり、スウェーデン全土から学生が集まる人気校です。また、EU諸国からも留学生が集まっています。(写真1)

日本の歯学部は6年制ですが、スウェーデン



写真1 学生寮の仲間

の歯学部は5年制のカリキュラムです。私が研修を受けた時には4年生に混じって臨床実習や講義を受けました。私がウメオにいた時期の4年生は、既に何人もの患者さんを担当し臨床実習を行っていました。学生が2人一組となって一般的な歯科治療(詰め物や被せ物の治療や、歯ぐきや歯の根の治療など)を行い、必要に応

じて教員の指導やチェックを受けて治療を進めていました。(写真1-1)

ウメオ大学歯学部の特徴に、学生のうちから多くの患者さんの治療を経験することができるということがあります。残念ながら私が術者として治療をすることは制度上の問題でできませんでしたが、実習中はほとんど術者のアシストとして治療に参加することができました。スウェーデンの人々の多くは英語が話せるので治療を英語で行うことができ、私がアシストに加わってもスムーズに術者と連携することができるし、患者さんや指導医を交えて会話することもできるので、毎日楽しく実習に挑むことができました。また、術者の学生と診断や治療計画について議論できたことも非常に有意義な経験でした。(写真2)

スウェーデンにはFIKA（フィーカ）という文化があります。みんなでコーヒーなどを飲みながら一息つく習慣で、午前でも午後でもちょっと時間があれば「FIKAに行こう!」と言って休憩します。日本では実習時間中に勝手に休憩を取るのははばかれますが、スウェーデ



写真1-1 忙しくても陽気な仲間達



写真2 模型を使った実習風景

ンではよく行われます。一日、治療をしてFIKAをしてまた治療をしてと、2,3人で共に時間を過ごしていると、チームのような一体感が生まれるし、常にフレッシュな気持ちで治療にむかえるのでとても良い文化だと感じました。(写真3)

ウメオ大学での研修は患者さんと接する機会が多く、自分が一人の医療従事者として患者さんに関わっているということを強く自覚することができました。また、学生や教員と議論をする中で、私の拙い英語力でも議論ができたのは、私が北海道大学歯学部で経験し学んだことは世界で通じる概念であったと改めて知りました。今後もこのような素晴らしい研修制度を活用して、様々な経験を積まれる方が増えてくれることを願います。



写真3 FIKA中にもディスカッション

北海道大学病院歯科診療センターのご案内

最近、歯に関して気になることはありませんか？ もしあれば、北海道大学病院の歯科外来をご受診下さい（健康保険証をご持参下さい）。皆様の受診をお待ちしております。定期的な歯の健康診査や歯石の除去、歯に関する相談だけでも歓迎いたします。

なお、当院では平成26年6月から新来予約制を導入しております。受診される場合は原則として事前予約が必要です。ご理解とご協力のほど、よろしくお願いいたします。

○事前予約の方法

- ・電話にて予約する

〈予約受付専用電話番号〉 011-706-7733

〈予約受付時間〉 平日9時00分～16時00分（なお、翌日の予約受付は15時00分まで）

※矯正歯科については、電話を受けた7日以降の予約となります。

※紹介状に記載されている当該歯科医師の診察を受けられない場合もありますので、ご了承下さい。

※電話予約の際は以下の内容を確認させていただきます。

1. 氏名
2. 性別
3. 生年月日
4. 連絡先（住所・電話番号）
5. 症状（診療科）
6. その他（当院での受診歴や紹介状の有無など）

※紹介状がなくとも予約受診できますが、その場合、初診料の他に特定療養費制度に基づく特別の料金として、3,240円を自費（保険外料金）でお支払いいただくこととなりますので、ご了承願います。

○歯科診療センターのご案内

☆第一診療室（2階）

予診室

☆第二診療室（2階）

小児・障害者歯科（TEL 706-4355） 小児と知的障害者の歯科治療と口腔管理

☆第三診療室（3階）

口腔内科（TEL 706-4349）

口の粘膜の病気の治療、口腔ケア

口腔外科（TEL 706-4349）

顎や口の中の外科治療

矯正歯科（TEL 706-4352）

歯ならびやかみ合わせの治療

歯科放射線科（TEL 706-4356）

放射線治療前後の口の中の管理

顎関節治療部門（TEL 706-4386）

顎関節症の治療

顎口腔機能治療部門（TEL 706-4388）

顎変形症、口蓋裂患者の総合的治療

口腔インプラント治療部門（TEL 706-4391）

人工歯根による歯の回復

歯科手術センター・歯科麻酔科（TEL 706-4345） 歯科治療のための麻酔管理、ペインクリニック

☆第四診療室（4階）

歯冠修復科（TEL 706-4346）

新しい材料を用いた、むし歯の治療

義歯補綴科（TEL 706-4346）

入れ歯による、かみ合わせの回復

高齢者歯科（TEL 706-4358）

高齢者の歯の治療、口腔管理

口腔総合治療部

☆第五診療室（5階）

予防歯科（TEL 706-4342）

定期歯科健診と予防処置、口腔ケア全般

歯周・歯内療法科（TEL 706-4343）

歯の根の治療、歯周病の治療

冠橋義歯補綴科（TEL 706-4343）

冠、ブリッジによる、かみ合わせの回復

口腔総合治療部

☆グループ系専門外来

口臭外来（予防歯科 TEL 706-4342）

歯ざしり外来（歯周・歯内療法科 TEL 706-4343）

摂食、嚥下機能外来（口腔内科 TEL 706-4349）

審美歯科外来（歯冠修復科 TEL 706-4346）

口臭でお悩みの方

歯ざしり、くいしばりでお悩みの方

摂食、嚥下障害のある患者さん

歯や歯ぐきの着色、変色の治療

編集後記

今年も広報誌第16号を皆様にお届けできることを嬉しく思います。昨年の編集後記でも書きましたが、例年と同じにならないようにと・・・思いながらも、やはり今年も似たような内容になってしまいました。今年は新たに「若手研究者紹介」コーナーを設けてみたのですが、如何でしょうか。来年も何か新たな企画の一つは入れたいと思います。

今年も歯学部学生に原稿を依頼したところ、快く引き受けてくれました。増田さん「さくらの女王」おめでとうございます。大学院生の柳先生、国体4位おめでとうございます。素敵な原稿をありがとうございました。今年も卒業生を含む北大歯学部の学生が様々な場所で活躍していることを本当に頼もしく、そして嬉しく思います。原稿を送ってくれた皆様にはこの場をお借りして御礼申し上げます。

本誌に対する皆様からのご意見、ご要望などがございましたら、巻末に挟み込みました葉書にて当委員会までお知らせ下さい。

（2016年7月 広報委員会委員長 土門卓文）

第1号からこの広報誌を作成して参りました。その間に歯学部も歯学研究科も歯科診療センターも建物が変わり、研修医制度や学部学生のカリキュラムなども変わり、変動していくことに携わってきました。また、それを広報して参りました。今後も大きく変動し、飛躍し続けるものと思います。それを広報して行きたいと思っております。今後もよろしくお願ひします。

（広報委員会編集人 金子知生）

郵便はがき

060-8586

52円切手
をお貼り下
さい

(受取人)

札幌市北区北十三条西七丁目

北海道大学大学院歯学研究科・歯学部

広報委員会
行

広報誌へのご意見・ご要望等をお書き下さい

差し支えなければご連絡先をお書き下さい

お名前 _____

ご住所 〒 _____

電 話 _____



北海道大学大学院歯学研究科・歯学部・歯科診療センター広報

第16号 2016年(平成28年)8月発行
北海道大学大学院歯学研究科・広報委員会

編集人 兼平 孝・金子 知生
発行人 土門 卓文
印刷・製本 株式会社正文舎